学生たちがデザインしたチラシとポケットティッシュ

本田裕子
大正大学 / 「野生生物と社会」学会 理事

コロナ禍で模索される学びの中で

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が2020年初頭から2年以上続いている。さまざまな人たちが影響を受けているが、大学生の影響は非常に大きい。オンライン授業が実施できたことで学習機会の確保はできている。しかし、大学内外での交流の機会が減り、特に体験型の学びの機会が失われている。

2017年度から毎年夏に学生有志とツシマヤマネコの交通事故防止を目的としたボランティア活動を実施してきたが、2020年度は中止、2021年度は日程を模索したがやはり残念ながら訪問することは叶わなかった。

交通事故防止に役立ちたいと学生たちがデザインし、対馬を訪問した際に配布する予定であったチラシとポケットティッシュは、2022年2月末に、環境省対馬野生生物保護センター、対馬市役所、島内2か所の交通安全協会、観光物産協会に送ることができた。それについては2022年3月23日読売新聞の長崎地域版にも紹介していただいた。

環境を学ぶ上で体験学習は重要であり、2年連続で対馬を訪問できなかった学生たちの失われた機会はあまりに大きい。しかし、コロナ禍で制約が大きい中でも、彼らが意識啓発活動に少しでも「役立った」と思えることは、今後の学びに影響を与えるだろうと期待したい。

彼らの責任でもないのに、彼らは将来「コロナ世代」と揶揄されるかもしれない。しかし、コロナ禍でも模索した学びで得たものを財産として生かすことができれば、彼らはより大きく成長していくだろう。